

高岡の図書館

第103号

2017. 9. 1

編集・発行 高岡市立中央図書館（〒933-0023 富山県高岡市末広町1-7） TEL 0766 (20) 1818 FAX 0766 (20) 1819

人と人がつながる市民創造都市高岡の図書館として

高岡市教育委員会 教育長 米谷和也

昨年、諸事情があり、私は前職で県の「学校図書館協議会」の会長を務めることとなった。学校図書館協議会とは、学校における読書活動や図書館活動の振興を図ることを目的とする全国組織であり、馴染みのあるところでは読書感想文コンクールや読書感想画コンクールを主催している。また、隔年で「全国学校図書館研究大会」を開催しており、昨年の神戸大会には私も参加することとなった。この大会には全国の学校図書館司書や司書教諭など、2000名を超える関係者が参加し、真夏の8月の3日間、記念講演会からワークショップにと熱のこもった研修が展開される。私も初めて参加して、このような熱心な方々の献身的な努力によって、学校図書館の活動が成り立っているのだと再認識した。

実は、この全国大会が平成30年8月に富山県で開催される。その経緯で会長を1年務めることになったが、実り多い大会となるよう、引き続き関係各位のご理解とご支援を心からお願いするところである。

さて、ここで図書館そのものの機能に目を向けると、学校図書館協議会が記すところでは、学校図書館の役割として、「読書センター」、「情報センター」、「学習センター」の3つをあげている。学校図書館は、読書を通して読解力を培い心豊かな人間性を育むとともに、様々な資料・情報を提供し、それらを活用して自ら課題を解決する学習の拠点となる。

これらの機能は、公共図書館においてさらに充実したものとして提供されることが望まれるが、厳しい財政状況下では財源の確保は容易ではない。

加えて、ICT技術の飛躍的な発展により、図書館に出向いて蔵書の山に立ち向かうよりも、手元のパソコンやタブレットで電子書籍やデータベースを検索し、さらには取りまとめた成果を広く世界に発信できる便利な環境が現実のものとなっている。「それでも図書館が必要だ」と断言できるよう、リアルな図書館の機能をより明確にアピールしていくことが大切だと思う。

今の子供たちは、生まれたときから電子媒体に囲まれて育つデジタルネイティブである。四六時中スマートフォンを手にし、電子書籍にも違和感はない。しかし1冊、1冊の本を手にとって読み進めること、質感をとまなう記憶を重ねていくこと、それが大切だということを図書館は示していかなければならないと思う。そうでなければ10年後、20年後、新刊本を提供するだけの図書館は使命を終えてしまうのではないだろうか。

また、図書館の充実具合はその地域の文化の成熟度を示すバロメーターだと思う。高岡には、古代から現代に至るまで、世界に誇る多くの歴史や文化の遺産がある。それを磨き上げ、次世代へとつなげていくのが市民一人ひとりの皆さんであり、その牽引役を担うのが図書館だと考えている。総合計画に掲げる「人と人がつながる市民創造都市高岡」を推進していくためにも、図書館に人々が集い、つながり、あらたな地域文化を創造していく場となっていくことが、市民創造都市にふさわしい図書館の役割であろうかと考えている。

図書館を支える市民の皆さんの一層のご理解とご支援を心からお願いしてまいりたい。

大伴家持生誕 1300 年記念に寄せて

高岡市万葉歴史館 学芸課長 新谷 秀夫

今年は、養老 2（718）年生まれの大伴家持の数えて 1300 年目の記念の年にあたります。そのため高岡市では、10 月 1 日に勝興寺でおこなわれる記念セレモニーをはじめとして、「家持の時代」展（会場：高岡市美術館 会期：9 月 22 日～10 月 22 日）や「家持が見た薬草」展（会場：高岡市万葉歴史館 会期：8 月 23 日～10 月 16 日）などの展示会や演劇「大伴家持“剣に歌に、夢が翔ぶ！”」（高岡公演：11 月 26 日、その他金沢市、越前市、東京で公演）など、さまざまな記念イベントが開催されます。

ところで、今さらながらかもしれませんが、なぜ家持の生誕記念イベントが高岡市で開催されるのでしょうか。天平 18（746）年からの 5 年間、越中国守として赴任していたことがいちばんの理由ですが、それならば、家持の生まれは現在の奈良市ですし、越中以降も日本各地に赴任していましたので、どこでも記念の年を祝ってもおかしくありません。そのなかであえて高岡市でおこなうのは、もっと大事な理由があります。

『万葉集』に残された家持の歌は 473 首を数えます。全 20 巻 4516 首の約 1 割で、個人としては最多を誇ります。しかも、473 首のうち 223 首が越中国守時代に詠んだ歌なので、家持の歌の約半数が越中ゆかりの歌ということになります。『万葉集』最多歌数を誇る歌人の約半数が越中ゆかりとなれば、家持という歌人を考える上で越中という場所が重要な場所と考えてもおかしくありません。と言うことで、当時の越中の国庁があった高岡市で家持の生誕 1300 年を祝うことになったのです。

さて、越中ゆかりの家持の歌 223 首のなかには、皆さんが暗唱できる歌が 1 つや 2 つあることでしょう。たぶん、それらは越中国守時代の家持を代表する名歌と考えられている歌だと思えますが、じつは家持を代表する歌《面歌》^{おもてうた}となると、いささか異なる歌が取りあげられます。

ひとつの基準として、昭和以降に公刊された『万葉集』の秀歌選（アンソロジー）に取りあげられた家持の歌を見てみると、

- A 斎藤茂吉『万葉秀歌』
(昭和 13 年 岩波新書)
- B 山本健吉・池田弥三郎『萬葉百歌』
(昭和 38 年 中公新書)
- C 松尾 聡『万葉の秀歌』
(昭和 40 年 武蔵野書院)
- D 久松潜一『万葉秀歌』
(昭和 51 年 講談社学術文庫)
- E 中西 進『万葉の秀歌』
(昭和 59 年 講談社現代新書)

これら、いまでも入手可能な 5 種がすべて取りあげる家持の歌があります。それは、「春愁三首」^{しゆんしゆう}もしくは「絶唱三首」^{ぜつしょう}と呼ばれている

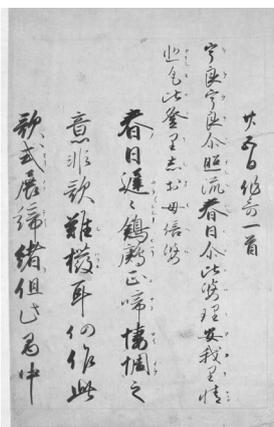
はるの かに 春の野に 霞たなびき うら悲し
この夕影に うぐひす鳴くも (巻 19・4290)

わがやどの いささ群竹 吹く風の
音のかそけき この夕かも (巻 19・4291)

うらうらに 照れる春日に ひばり上がり
心悲しも ひとりし思へば (巻 19・4292)

の 3 首です。いずれもが取りあげたように、家持を代表する《面歌》^{おもてうた}と言え、間違いなくこの 3 首を挙げなければなりません。しかし、残念ながらこの 3 首は越中国守時代の歌ではありません。高岡市民とすれば、家持の《面歌》は越中ゆかりの歌から選んでほしいと思うでしょうが、この 3 首はやはり歌人家持が到達した最高傑作であり、外すことはできないのです。それでは、越中国守時代の

家持を代表する歌は？
ということになります
が、これがまた、一筋
縄にはいかない状況に
あります。



金沢文庫本『万葉集』巻十九断簡

家持の《面歌》「春愁三首」の一首(4292部分)を含む。
(高岡市万葉歴史館蔵)

越中国守時代の歌を割と取りあげるEとほとんど取りあげないBやCというように、さきの5種の秀歌選はそれぞれの選者の好みが反映されています。そのなかで、2つ以上の秀歌選が取りあげる歌が8首あります。

あぶらび ひかり み かづら
油火の 光に見ゆる わが縷
さ百合の花の 笑まはしきかも
(巻18・4086 AとEが選歌)

すめろき みよさか
天皇の 御代栄えむと
あづま みちのくやま くがはなはな
東なる 陸奥山に 金花咲く
(巻18・4097 AとEが選歌)

この見ゆる くも ほびこりて との曇り
雨も降らぬか 心足らひに
(巻18・4123 AとDが選歌)

ゆき うへ て つくよ
雪の上に 照れる月夜に
うめ はな を おく は こ
梅の花 折りて贈らむ 愛しき子もがも
(巻18・4134 AとEが選歌)

はる その くれなゐ
春の苑 紅にほふ
もも はな したで みち い た をとめ
桃の花 下照る道に 出で立つ娘子
(巻19・4139 AとCとEが選歌)

はる がな
春まけて もの悲しきに
よ は ふ な しぎ た た す
さ夜ふけて 羽振き鳴く鳴 誰が田にか住む
(巻19・4141 AとBが選歌)

あさとこ き はる
朝床に 聞けば遙けし
いみづ かは あさこ うた ふなびと
射水河 朝漕ぎしつ 唱ふ船人
(巻19・4150 BとDが選歌)

ゆき けのこ ととき ゆ
この雪の 消残る時に いざ行かな
やまたちはな み て み
山橘の 実の照るも見む
(巻19・4226 AとEが選歌)

おそらくそれぞれの歌の『万葉集』における意味などを考慮して選歌されたのでしょうか、高岡市民が暗唱できる歌としてはあまり取りあげられることのない歌が含まれています。しかも、高岡市の観光パンフレットにはかならず取りあげられる

たま ふたがみやま
玉くしげ 二上山に
な とり こゑ こひ ととき き
鳴く鳥の 声の恋しき 時は来にけり
(巻17・3967)

うま な ゆ
馬並めて いざうち行かな
しふたに きよ いそみ よ なみ み
洪谿の 清き磯廻に 寄する波見に
(巻17・3954)

の2首はいずれの秀歌選にも取りあげられていませんし、《高岡市の花・カタカゴ(カタクリ)》

を詠んだ

もののふの や そ をとめ く
八十娘子らが 泣みまがふ
てらる うへ かたか こ はな
寺井の上の 堅香子の花 (巻19・4143)

もAが取りあげるだけなのです。『万葉集』全体から均等に歌を選ばなければならない制約もあったのですが、高岡市民としてはいささか物足りない状況にあることが残念でなりません。

このように、秀歌選を基準に考えると、皆さんが望むように家持の《面歌》を越中国守時代の歌から選ぶことはできなくなってしまいます。「立山」を詠んだ歌もEしか取りあげませんし、越中方言を詠んだ「あゆの風」の歌(巻17・4017)はいずれも取りあげていませんから、5種の秀歌選は越中国守時代の歌をまったく紹介していないと言っても過言ではないと思います。そのような状況下で、あえて越中国守時代の歌から《面歌》を選ぶとすると、やはり3つの秀歌選に取りあげられている「春の苑」の歌(巻19・4139)ということになるのかもしれませんが。

さて、これはあくまでも秀歌選を基準にしたらという考え方です。万葉愛好家の方々は、たぶん越中国守時代の家持の歌から、数多くの名歌を挙げられることでしょう。また、高岡市ゆかりの方々ならば、それぞれに思い入れの歌があるかもしれません。たしかに秀歌選には取りあげられていないかもしれませんが、皆さんが良いと思って暗唱されている歌は、家持の詠んだ名歌であることには違いありません。惜しくも誰もが認める《面歌》は逃しましたが、家持が詠んだ名歌が数多く残されていることはまちがいなく、その点で越中、つまり現在の富山県は、家持ゆかりの地として生誕1300年を祝うにふさわしい場所なのです。



三十六歌仙絵「大伴家持」(高岡市万葉歴史館蔵)

ふるさと情報コーナー

高岡関係資料情報

平成27年度に発行された図書や雑誌・新聞に掲載された高岡関係資料のうち、図書館で把握できた文献の一部を紹介いたします。(配列はおおむね富山県郷土資料分類表に準じ、論題名・執筆者名(敬称略)・資料名・巻号数・出版年月の順に記載しました。)

- 郷土の文化 第41輯(平成28年 富山県立図書館、富山県郷土史会共編 富山県郷土史会刊 平成28年3月)
慶賀祭 厳かに 遷座140年 射水神社 (北日本新聞 平成27年9月24日)
平米校区寺院巡り (高岡市立平米公民館編刊 平成27年9月)
市内遺跡調査概報 25 平成26年度 (高岡市教育委員会編刊 平成28年3月)
高岡市史料集 第27集 (高岡市立中央図書館編刊 平成28年3月)
未来を見つめて 高岡市・中田町合併50周年記念誌 (高岡市合併50周年記念事業実行委員会編刊 平成28年2月)
国史跡指定記念高岡城跡の魅力 特別展 (高岡市立博物館編刊 平成27年7月)
過去と未来が融合する町高岡 石原直著 (大塚葉報 708号 平成27年9月)
高峰譲吉博士文献目録 太田久夫著 (北陸医史 38号 平成28年2月)
長崎家資料と寺畑喜朔先生・正橋剛二先生 太田久夫著 (北陸医史 38号 平成28年2月)
とやま偉人列伝 大橋八郎 (富山県人 1222号 平成27年8月)
とやま人物一代記 アカデミー賞映画監督 滝田洋二郎氏(上)(下) (富山県人 1223号~1224号 平成27年9月~10月)
堀田善衛 大塚英良著 (文学者掃苔録図書館 原書房刊 平成27年7月)
高岡市山町筋〔商家町〕 苅谷勇雅著 (日本の町並み 下巻 山川出版社刊 平成28年3月)
高岡市吉久〔在郷町〕 高田克宏著 (日本の町並み 下巻 山川出版社刊 平成28年3月)
袋町(ふくろちょう)平米町(ひらまいちょう)高岡2旧町名 きょう復活 (北日本新聞 平成27年4月20日)
富山県議会四力年の回顧 平成23年—平成27年 (富山県議会事務局編 富山県議会刊 平成27年7月)
高岡市10年のあゆみ (高岡市編刊 平成27年)
高岡市・高岡法科大学連携フォーラム「住民参加とまちづくり」 (高岡法学 第34号 平成28年3月)
高岡御車山の意匠 時を越える美と心 (MOV IN 24号 平成28年3月)
高岡御車山 名工の技、町衆の誇り 重要有形民俗文化財・重要無形文化財 (神保成伍著 文苑堂書店刊 平成27年6月)
伝承を訪ねて 第61回—方言で読む—高岡の昔話 樽谷雅好著 (VITA 104号 平成28年3月)
小矢部川水系のすこやかさ調査 河(水辺)へ行ってみよう! (安田郁子監修 環の会執筆・刊 平成27年9月)
高岡市山町筋、高岡市金屋町、南砺市相倉、南砺市菅沼、城端 (歴史と文化の町並み事典 中央公論美術出版刊 平成27年8月)
高岡ガス100周年記念史 (高岡ガス株式会社〔編〕刊 平成27年12月)
ニッチを極める 10 児童向けノートのトップブランド ショウワノート(高岡市) (アクタス 27巻10号 平成27年9月)
五位ダムの里・安納芋と五位米でふる里起こし (ふるさと夢とやま 第37号 平成28年2月)
銅版画家南桂子 メルヘンの小さな王国へ (コロナ・ブックス編集部編 平凡社刊 平成28年3月)
ドラえもん／源義仲・巴御前／安宅の関／大伴家持 墨威宏著 (銅像歴史散歩 筑摩書房刊 平成28年3月)
富山文学の黎明 1 漢文小説『蛭洲餘珠』(巻上)を読む(磯部祐子、森賀一恵著 桂書房刊 平成28年3月)
むかしの富山を読む 一越中紀行文集(口絵解説) 太田久夫著 (富山教育 924号 平成28年2月)
高岡市万葉歴史館紀要 第26号 (高岡市万葉歴史館編刊 平成28年3月)
古写本の魅力 (高岡市万葉歴史館叢書 28 高岡市万葉歴史館編刊 平成28年3月)
『郷土の文化 第41輯、第42輯』(平成28年、29年刊)より平成28年3月までを抜粋

「高岡の図書館」 高岡ミニ人物史 一覧

創刊号発行より102号まで、図書館では、98人の郷土の先覚を紹介、記述してきた。簡単ではあるが、その業績や足跡を2回に分けて振り返りたい。

(敬称略)

人 名	号 数	ねんざい	生没年(西暦)	業 績 な ど
加賀藩主				
前田 利長	37号	36	1562～1614	高岡の開祖。加賀藩2代藩主、初めの名は利勝。尾張の生まれ
前田 治脩	51号	49	1745～1810	勝興寺第18代住職、還俗して加賀藩11代藩主。隠居後肥前守
政治家・行政に尽くした人々				
川合又右衛門(2代)	22号	21	1551～1640	初代は、加賀藩最初の十村。初代～2代共に戸出野開き、開発に尽力。
安藤 兵九郎	11号	10	1643頃～1708	十村の家柄、用水開削、土地開墾。小矢部川の水を引く大事業
沢田 清兵衛	28号	27	1764～1829	開墾・治水の功労者。庄川沿岸両流域の開拓、農地開発
山本 道斎	26号	25	1814～1855	勤皇の志士。医業の傍ら、書齋「牛馬堂」が政治・文化運動の中心に。
長屋 八内	50号	48	1823～1903	高岡を愛し民衆を救った名町奉行。辞して後、金沢で受洗し布教した。
逸見 文九郎	31号	30	1825～1875	勤皇の志士。蛤御門の変。出獄後町民に尽くす。蔵宿高原屋の生まれ
鳥山 敬二郎	54号	52	1842～1926	近代高岡の礎を築いた人。7～8代高岡市長。富山県分県運動に尽力。
服部 嘉十郎	4号	4	1845～1880	町役人、由緒町人の家柄、高岡の区長、市長。高岡古城公園創設。
藤井 能三	21号	20	1846～1913	廻船問屋の生まれ。伏木港を開き教育などに尽くした先覚者
堀 二作	41号	40	1849～1939	治政の功労者、村長、県会議長、高岡市長(近代高岡の基礎づくり)
島田 孝之	24号	23	1850～1907	中田町出身。気骨の民権政治家。富山県分県に尽力
吉田久兵衛(11代)	75号	71	1864～1919	中田町制の慈父。30年以上中田町長。県会議長、住民福祉の向上
上埜 安太郎	80号	76	1865～1939	政治家。県会議長、衆議院～立憲政友会、9代高岡市長、富山市長
南 弘	19号	18	1869～1946	富山県初の大臣。台湾総督。逓信大臣として入閣、枢密顧問官
木津太郎平(6代)	42号	41	1875～1950	廻船問屋の生まれ。高岡商工会議所会頭、衆議院議員、13、14代高岡市長
二上 兵治	52号	50	1878～1945	高岡で生まれた行政官。逓信省を皮切りに官界一筋。国政発展に尽力。
大橋 八郎	79号	75	1885～1968	逓信事業一筋の官僚。二二六事件、終戦時の玉音放送「録音盤事件」
土倉 宗明	30号	29	1889～1972	政治家。国事に奔走し、衆議院の異彩といわれる。中田町長
大窪 マスミ	66号	63	1908～1976	婦人解放運動の第一人者。戦後、女性初の富山県議会議員などを生む。
産業界の発展に尽くした人々				
大 長	7号	7	1771～1856	公益任侠家。大工の家柄、大親分。大門庄川の全川架橋に尽力。
石井勇助(初～3代)	12号	11	1810～(初代)	漆工家。伝統工芸高岡漆器「勇助塗」の創始者、継承者
金森 宗七	18号	17	1821～1892	高岡銅器発展の功労者。海外貿易、内外の博覧会等で受賞
篠田 茂三郎	85号	81	1837～1895	景岸焼(福岡焼)の創始者。万国博覧会出品、輸出陶器の振興
荒井 莊藏	9・10号	9	1853～1908	高岡産業近代化の先覚者。高岡銀行、高岡紡績、高岡電燈(株)創立
林 忠正	23号	22	1856～1906	長崎家の生まれ。東西文化交流の先覚者。日本美術を海外に伝えた。
塩崎 利平(5代)	48号	46	1856～1918	金物商。高岡銅器の輸出、万国博出品、高岡市議会議員として活躍。
関 義平	35号	34	1857～1923	高岡銅器発展の功労者。彫金の名工、教育・金工業界を指導。
笹原 文次	58号	56	1857～1927	高岡捺染界の大恩人。「高岡染」の再起をはかり、友禪染研究
菅野 伝右衛門	40号	39	1859～1900	廻船業。高岡商工会議所初代会頭、菅野家住宅は、重要文化財指定
老子次右衛門(7代)	63号	60	1878～1962	名鐘づくりの開祖。梵鐘の音色と形を追求。「たたら」を踏んだ最後の職人
畑 正吉	94号	90	1881～1966	文化勲章等をデザインした彫刻家。造幣局、彫刻家研究所
国井 喜太郎	46号	44	1883～1967	我が国産業デザイン界の父、国立工芸指導所初代所長
大野 為次	93号	89	1892～1991	昭和の紙幣図案者(印刷局初の紙幣図案職)。証券や記念切手など図案
加茂 善治	95号	91	1892～1976	「加茂農事研究所」創設、絶滅の危機にあった古城公園の桜復活
吉田 鉄郎	100号	96	1894～1956	日本のモダニズム建築の旗手。逓信省で建築に関わる。住宅建築
米 治一	82号	78	1896～1985	彫塑家。銅像の原型製作に関わり、全国各地の銅像・仏像など製作。
今村 政雄	102号	98	1898～1973	中田地区の産業振興と中田町政に尽力した。共栄製菓社長、中田町長
高瀬 想風	91号	87	1898～1977	漆工家。高岡錆絵の近代化に努めた。富山県指定無形文化財保持者
般若 侑弘	57号	55	1898～1980	日本芸術院賞を受賞した染色作家。染色工芸界の重鎮
彼谷 芳水	67号	64	1899～1994	漆工家、勇助塗継承者、富山県指定無形文化財保持者
荒井 三郎	8号	8	1906～1988	実業家、高岡のアルミ鋳造の草分け、ブラジルへ進出
金森 映井智	81号	77	1908～2001	高岡彫金の名工。県在住作家として初の重要無形文化財保持者(人間国宝)
竹平 政太郎	74号	70	1908～2003	産業人に徹して生きた。高岡アルミ工業の基盤づくり、経済界の重鎮
沖 外夫	77号	73	1925～1986	実業家・政治家、岳父らと三協アルミニウム工業設立、参議院議員
大角 勲	90号	86	1940～2010	金属造形作家。「宇宙生命の追求」をテーマに、抽象的なオブジェ制作
大澤 光民	87号	83	1941 生まれ	鑄金作家。日本工芸会、高岡二人目の重要無形文化財保持者

参考資料：『立山を仰いでーふるさとの先賢 富山県教育記念館』ほか

戸出駅と中越鉄道

蒸気機関車が富山県で初めて運転されたのは、明治30年（1897）5月。福野・黒田（現在の下黒田）間を結んだ中越鉄道が開業された。新橋－横浜間を結んだ国内で最初の鉄道開業から、わずか25年後のことである。

中越鉄道設立に当たっては、初代社長となる鷹栖村（現在の砺波市）の大矢四郎兵衛、中田町（現在の高岡市）の島田孝之、富山市出身の吉田茂勝らが発起人となった。日本海側初の民営鉄道である。設立当初の株主構成は、主要株主を除きほとんどが砺波郡の地元住民であった。同31年（1898）には城端－高岡間が全通し、やがて伏木・氷見まで延長された。高岡－伏木間の開通によって、伏木港へ米を始めとした農産物の物資輸送が促され、絹・綿織物などの生産が一層盛んになった。砺波地方の産業振興に多大な役割を果たしたと言える。大正9年（1920）国有化された後、昭和17年（1942）には城端－高岡間を城端線とし、高岡－氷見間を氷見線と改称し、現在に至る。

【戸出駅舎】

中越鉄道開業に先立ち、明治29年（1896）10月に戸出駅を建設している。木造平屋建、棧瓦葺の駅舎は増築はしているものの、全面改築はされずに当時の姿を残している。福野駅と並び、県内で最も古い駅舎である。平成22年（2010）、「とやまの近代歴史遺産百選」に選定された。

【跨線橋】

下りホームへ連絡する跨線橋は、戦時中の供出により取り壊されたが、乗降の能率化・危険防止のため昭和29年（1954）12月に再び整備された。近隣町民待望の整備とあって、

竣工式には餅撒き、商工会による城端むぎや手踊り「戸出音頭・戸出小唄」が催された。

【中越弁慶号】

中越鉄道が開業した当初導入された機関車はイギリス・マンチェスターのナスミス・ウィルソン社製。同型3台を輸入し、海路で伏木港へ到着した。その後千保川、玄手川の舟便により柳島（現在の西藤平蔵柳島地区）へ運ばれ、戸出駅に隣接した粉碎工場跡機関庫で組み立てられた。そのため、戸出駅は富山県の鉄道文化発祥の地といわれている。明治30年（1897）当初から大正13年（1924）まで客車・貨車を牽引した。その後は電気化学工業青海工場へ譲渡され、石灰岩の運搬に活用された。昭和40年（1965）砺波市に譲渡された。現存する1台は、砺波チューリップ公園に保存展示されている。当時の中越鉄道、ナスミス・ウィルソン社の銘板も確認できる。平成9年（1997）砺波市指定文化財。

《参考資料》

『戸出町史』『城端線 あしたにつなぐ物語』『鉄道の記憶』『広報といで』他

（押川 千陽 記）



現在の戸出駅舎

お知らせ

行事予定 (変更になる場合があります)

中央図書館

- えほんのじかん 毎週月～金曜日
(祝日、第4月曜日を除く)
午前11時～15分程度
- えほんの広場 毎週土、日曜日、祝日
(第4月曜日を除く)
午前11時～30分程度
- おはなし会 毎月第1土曜日
午後2時～2時30分
- 図書館ボランティア「おはなし会」 毎月第2土曜日
午後2時～2時30分
- おはなしポケット 毎月第3土曜日
午後2時～2時30分
- どんぐりコロコロ 毎月第4土曜日
午後2時～2時30分
- 高岡婦人読書会 毎月第3水曜日
午後2時～
- 「古文書を学ぶ会」 10月7日(土)
午前10時～11時30分
(受講受付締切ました)

伏木図書館

- こども読み聞かせ会 毎週土曜日
午前11時～
- 古典の会 毎月第2日曜日
午前10時～
- 読書会 毎月第3土曜日
午後1時30分～

戸出図書館

- こども読み聞かせ会 毎週土曜日
午前11時～

中田図書館

- 子ども読み聞かせ会 毎週土曜日
午前10時30分～

福岡図書館

- おはなしの部屋(読み聞かせ等) 毎週土曜日
午前11時～

・古文書で学ぶ高岡の歴史

高岡市史料集解説講座 高岡市史料集第28集より

「近世の金屋町」

9月9日(土)

午前10時～11時30分

高岡市生涯学習センター 5階研修室501にて
講師の山崎明代さん(『高岡市史料集』解説講師)
に翻刻した古文書の解説をしていただきます。
資料代100円(募集は9月1日(金)～)



※ 中央図書館は毎月第4月曜日のみ休館します。(年末年始 12月29日～1月3日 休館)

伏木・戸出・中田・福岡図書館利用案内

9月							10月							11月							12月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
					1	2	1	②	③	4	5	6	7				1	2	③	4						1	2
3	④	⑤	6	7	8	9	8	⑨	⑩	⑪	12	13	14	5	⑥	⑦	8	9	10	11	3	④	⑤	6	7	8	9
10	⑪	⑫	13	14	15	16	⑮	16	⑰	18	19	20	21	12	⑬	⑭	15	16	17	18	10	⑪	⑫	13	14	15	16
⑰	⑱	⑲	⑳	21	22	⑳	22	⑳	㉑	25	26	27	28	⑰	20	㉑	22	㉓	㉔	25	⑰	18	⑲	20	21	22	㉓
24	㉕	㉖	27	28	29	30	29	㉗	㉘					26	㉗	㉘	29	30			24	㉕	㉖	27	28	㉙	㉚
																											㉛

○印は伏木・戸出・中田図書館の休館日 □印は福岡図書館の休館日

高岡市立中央図書館	〒933-0023 末広町1-7	TEL (0766) 20-1818	FAX (0766) 20-1819
高岡市立伏木図書館	〒933-0104 伏木湊町13-1	TEL (0766) 44-0073	FAX (0766) 44-0073
高岡市立戸出図書館	〒939-1104 戸出町3-19-29	TEL (0766) 63-1254	FAX (0766) 63-1254
高岡市立中田図書館	〒939-1272 下麻生1108	TEL (0766) 36-0054	FAX (0766) 36-0054
高岡市立福岡図書館	〒939-0132 福岡町大滝44	TEL (0766) 64-1034	FAX (0766) 64-1038